

ベトナムと日本の近代における「文明開化」

——福澤諭吉とファン・ボイ・チャウの「文明開化」観念を比較して

ファム・ティ・トゥ・ザン

要旨：

近代には、西洋諸国による東方諸国の植民地化の過程において悲しい歴史が目撃されたが、東方の国すべてがその暗い時代を経験したわけではない。日本は、ベトナムやその他のアジア諸国とは違い、19世紀半ばごろから20世紀初頭にかけて近代化に成功し、徐々に西洋諸国にキャッチアップした。本稿は、日本とベトナムの近代史における代表的な二人の人物（福澤諭吉〔1835-1901〕とファン・ボイ・チャウ〔1867-1940〕）の文明開化思想を分析・比較することにより、両国における一般の人々の西洋文明に対する態度を指摘し、その激動の時代に両国それぞれの辿った運命を決めた要因について簡単に評価を述べる。

* * *

はじめに

前近代においてアジア諸国は、西洋諸国に侵略されるという悲劇を経験した。しかし、アジア各国やベトナムとは異なり、19世紀終わりから20世紀初めごろまでに日本は近代化を成功させ、西洋諸国と肩を並べようとした。特に日露戦争で勝利を得てからは、日本は中国やベトナムの民族解放運動が目標とする国になった。多くの留学生が日本へ渡り、その経験から学ぼうとしたが、結局民族解放の夢は叶わなかった。日本が近代化を果たすことができたのに、なぜ同じ漢字文化圏のアジア諸国が、容易にその経験から学ぶことができなかったのか。それは歴史研究者にとって大きな課題である。

なぜ日本だけが歴史的危機を乗り越えられたのか。社会に深く根付いていた古い習慣や考え方を、日本人はどのように刷新したのか。

幕末に起こった明治維新は短期間になされたものであったが、日本社会にとっては非常に大きな転換期を迎えた。明治維新によってもたらされた1年間の変革は、他の時代の10年あるいは20年に相当するといっても過言ではない。明治維新を「革命」と呼べるかどうかという問題はまだ残っているが、政治システムの構想、社会

階層、さらに一般国民の生活の変革から見れば、他の革命に負けないほど大きな変化であった。その変革というのは、古い権力の代わりに新しい権力を形成すること、古い政治制度の代わりに新しい政治制度が成立したこと、古い習慣や時代遅れとされる文化を批判し、西洋から新しい文明を導入することである。

問題は、誰がその新しい風を日本社会に吹き込み、どのように社会を変革させるダイナミックなパワーに変えたのか、ということである。これは簡単に解決することができない問いであるが、本報告では、19世紀後半に起きた日本の改革運動の先駆者とされている福澤諭吉の「文明」と「文明開化」の観念を分析し、ベトナムの民族解放運動家であるファン・ボイ・チャウと比較することによって前述の問いに応えたい。

1. 福澤諭吉の思想における「文明」および「文明開化」

『日本史辞典』によれば、「文明開化とは civilization の訳語であり、福澤諭吉が初めて使ったという。明治前期において、ことに廃藩置県後の数年、西洋文明を目的とし、西洋文明に学んで日本の近代化を遂行していこうとする政府の諸事一新の国策を表現する言葉として、あるいは全国民的な新社会への期待と意欲の合言葉として流行した。文明開化の現象は、廃藩をはじめとする諸制度の改革や殖産興業政策から、衣食住の生活様式・風俗習慣まで、西洋文明の摂取となってあらわれ、それはしばしば表面的な模倣に走り、日本の実情にそぐわないことも多かった。そのことからまた、政府の強圧的¹態度によることもあって、文明開化政策に反発する新政反対一揆なども頻発した」という。

この定義よれば、「文明開化」は西洋文明によって日本を改革することである。つまり「文明開化」の「文明」というのは西洋文明であるという意味である。さらに日本で初めてこの言葉を使ったのは福澤諭吉である。このことから「文明開化」は特別な時期に作られ、歴史的意味を持っている言葉であるということが明らかになる。よって、この言葉の歴史的背景およびそこに含まれる意義を理解するため、まず福澤諭吉の思想から探ることが必要である。

実際に「文明開化」という言葉が初めて福澤諭吉の著書に出現したのは1875年である。『文明論之概略』において福澤諭吉は「文明」と「文明開化」について西洋の学者の考えを引用し、分析することから自身の意見を述べた。西洋の文明でもって日本を文明開化させるという考えは、福澤諭吉の晩年まで続いていたため、『文明論之概略』だけではなく、『学問のすゝめ』や『福翁自伝』などにも頻繁に使用された。

1 京大日本史辞典編纂会編『新編日本史辞典』東京創元社、1990年、885頁。

福澤諭吉によれば、「文明論とは人の精神発達²の議論なり²」ということである。つまり「文明論」の主な内容は物質的なものより人々の精神であり、心である。具体的に福澤諭吉は「文明」を次のように定義した。「その狭き字義に従えば、人力を以て徒に人間の需用を増し、衣食住の虚飾を多くするの意に解すべし。又その広き字義に従えば、衣食住の安楽のみならず、智を研ぎ徳を脩めて人間高尚の地位に昇るの意に解すべし³」。

さらに『学問のすゝめ』では、「元来文明とは、人の智徳を進め、人々身躬からその身を支配して世間相交り、相害することもなく害せらるゝこともなく、各その権義を達して一般の安全繁昌を致すを云うなり⁴」と述べた。つまり福澤諭吉によれば、「文明」とは精神的・物質的な要素を含むが精神的な要素の方が重視され、「文明開化」の目的は人々の知恵と道徳を高め、安全で繁栄した社会を作る、ということになる。

以上の観念から福澤諭吉は人類の文明を三つの「文明の齢」に分けた。それは野蛮、半野蛮、文明である。人類の歴史は野蛮から半野蛮へ、そして半野蛮から文明へと発展していく、というものである。また、『文明論之概略』においても、福澤諭吉は各段階の定義を設定した。それによれば、アフリカとオーストラリアは野蛮で、トルコや中国、日本などのアジア諸国は半野蛮、ヨーロッパとアメリカは文明である。つまり福澤諭吉の思想の中で「文明」とは、ヨーロッパとアメリカの文明を指すのである。しかし、その文明は^{あいたい}相対するものであり変化するものである。それは「文明化」というものである。さらにその過程においては文明化する現象と文明化される現象があると福澤は考えた。

問題は、福澤諭吉の思想の中で「文明化」と「文明開化」はどのように区別されていたのか、ということである。『学問のすゝめ』には、「今世界中を見渡すに、文明開化とて、文学も武備も盛んにして富強なる国あり、或は蛮野未開とて、文武ともに不行届にして貧弱なる国あり⁵」と書いてある。ここでの「文明開化」は、「文明化」より「文明」に近い。しかし、後に執筆される著書では、「文明」と「文明開化」が区別されるようになった。特に晩年に執筆された『福翁自伝』には「文明開化」という言葉が7回も使われており、ここでは「文明」よりも「文明化」の意味に近いと考えられる。さらに「文明開化」以外に、福澤は「文明開国」という言葉を、西洋文明を取り入れるため国を開くという意味として使っている。

このように福澤諭吉にとって、「文明」とは主に西洋の文明を指す言葉であり、「文

2 福澤諭吉『文明論之概略』（福澤諭吉著作集 第4巻）慶應義塾大学出版会、2002年、2頁。

3 『文明論之概略』、57頁。

4 福澤諭吉『学問のすゝめ』（福澤諭吉著作集 第3巻）慶應義塾大学出版会、2002年、80頁。

5 『学問のすゝめ』、26頁。誤記は引用者が改めた。

6 「文明開化」は『福翁自伝』に5回も使われた。富田正文校注『福翁自伝』（慶應義塾大学出版社、2001年）の198、201、234、264、266頁（2回）で合計5回も使われた。

明開化」はその西洋の文明で日本を改革するという意味である。つまり、西洋の文明は日本を改革し、近代化の道に進ませる一つの手段なのである。

2. なぜ文明開化をする必要があるのか

福澤は『文明論之概略』に「西洋の文明を目的とする事⁷」という章を設けた。さらに「文明は至大至重なり、人間万事これに向て道を避けざるものなし⁸」と強調した。そのため、アメリカ人の歴史学者であるアルバート・クレイグは「福澤にとって文明開化は将来のゴールだったのです」と述べている⁹。ここで論じなければならないのは、なぜ福澤と当時の日本人の知識人は他の道ではなく文明開化を選んだのか、ということである。この点については、福澤の著書から以下の三つの理由を見出すことができる。

第一は、福澤が当時の世界各国と比べ日本が遅れているということに気づいたからである。福澤は西洋の文明を日本に持ち帰った先駆者としてよく知られており、厳しい身分制度や古い風習などを激しく批判した。

また、父親が儒者であり、本人も 21 歳まで儒教を学んでいたが、『福翁自伝』の「漢家を敵視す」では次のように述べる。「緒方塾の近傍、中ノ島に華岡という漢医の大家であって、その塾の書生はいずれも福生とみえ、服装もりっぱで、なかなかもってわれわれ蘭学生のたぐいでない。毎度往来に出会って、もとよりことばも交えず、互いににらみ合うて行き違うそのあとで「あのざまあどうだい。着物ばかりきれいで何をしているんだ。空々寂々チンプンカンプンの講釈を聞いて、その中で古く手あかのついてるやつが塾長だ。こんなやつらが二千年来あかじみた傷寒論をみやげにして、国に帰って人を殺すとは恐ろしいじゃないか」¹⁰」。

しかし、注意すべきは、福澤は時代遅れの儒者を激しく批判したが、儒教の思想そのものの価値を否定したことはないということである。

その他、福澤は身分制度や官僚の威張る姿勢、そして男尊女卑や衣食住といった生活の古い風習などについてよく言及していた。それだけではなく、自ら古い風習を自分の生活から取り除いて先進的なものを取り入れた。それは当時、非常に危険なことであり、命にも関わることであった。

第二は、福澤が西洋各国からの侵略の危機を、十分に理解していたからである。『福翁自伝』では、何度も外国人の傲慢な態度と幕府の臆病な対応について批判し、侵略される危険を懸念していた。さらに西洋人が来日し、福澤をはじめ当時の日本の

7 『文明論之概略』、21 頁。

8 『文明論之概略』、63 頁。

9 アルバート・クレイグ『福澤論吉の歴史意識と文明開化』（福澤記念選書 35）慶應義塾大学、1985 年、18 頁。

10 富田正文校注『福翁自伝』慶應義塾大学出版会、2001 年、90 頁。

知識人にもっともショックを与えたのは、世界の中心は中国だけではなく、また別の文明があるという事実であった。中国よりもさらに強い国々が存在していると気づいた時、憧れていた中国のイメージがダウンした。今まで中国から学んでいた学問や技術は西洋諸国と対峙するにあたって万能のカギではないという恐怖感があっただけに違いない。特に日本の知識人は、西洋諸国に侵略されそうになる清朝の弱さを見て危機感を抱いた。このことから、なぜ福澤が脱亜し、日本の救世主として西洋文明を選んだのかを理解することができる。

福澤が実際にアジア各国を訪れたとき、植民地になった国々の悲劇を目の当たりにして、日本が侵略される可能性を切に感じたに違いない。

1862年にロンドンから大分県中津に住む島津祐太郎に送った手紙に、福澤はイギリスやフランスなどの政治制度、海軍・陸軍の組織、税金制度に驚いたと書き、「ご変革これ無くては済むまじく……」¹¹と懸念し、「当今の急務は富国強兵ござ候」としたためた。さらに、福澤は、富国強兵の根本は人材育成であるとしたうえで、島津に対して漢学をやめ洋学を習得すれば西洋諸国から書物や辞書を持ち帰ることを約束した。その手紙の文末には、一日も早く実行してほしいと島津に2度の催促をしている。

第三は、福澤が西洋の文明そのものの優越性を「理解できた」ということである。現代のフラット化する世界では情報が容易に交換できるため、福澤が「理解できた」ということにさほど驚きはしないが、当時のアジアと日本の状況から見れば、それは奇跡であり、日本が近代化を果たすことができた理由である。これは、16世紀に西洋の宣教師と商船がアジア各国に到来していたのに、なぜ日本だけに洋学という学問が芽生えたのかという問いにも関わる。

『福翁自伝』で、福澤は「長崎に落ち着き、初めて横文字のa b cというものを習うたが、いまでは日本国中いたるところに徳利の貼紙を見ても横文字はいくらもある。目に慣れて珍しくもないが、初めてのときはなかなかむずかしい。26文字を習うて覚えてしまうまでには3日も掛かりました」と述べている。¹²このように西洋の文明に接するにあたり、他の漢字文化圏の国々と同じように、やはり日本人も文化や言語の壁にぶつかった。しかも日本の内部からも反対の声が相次ぎ、幕府と国民の一部が西洋の文明を拒否した。さらに、幕府が鎖国や攘夷政策まで実施した時期もあった。ここで注目すべきことは、なぜその壁を乗り越え、今まで学んできた中国の学問や技術が時代遅れであると気づき、西洋の医学・印刷・造船などの技術を身に付けなければならない時代であると考えたようになったか、という点である。

福澤諭吉の場合、頭もよく、堅実で、正義が好きな人物であったが、それ以上に、

11 慶応義塾大学編『福澤諭吉の手紙』岩波文庫、2004年、13頁～15頁。

12 『福翁自伝』「故郷を去るに未練はない」、58頁。

時代の変化に敏感な人でもあった。

21歳の時に、故郷の中津は時代遅れで箱のように閉鎖的な世界であるといち早く気づいたため、中津を去り漢学をやめて、「横文字」を習得しに長崎へ出かけた。幸いにも、後に大阪で蘭学の大家である緒方洪庵に出会って、人生の転換期を迎えた。福澤は緒方洪庵の人格と学問に惹かれ、洋学に夢中になった。しかし、大阪だけでは満足できず、江戸に出向いた。ある日横浜へ出かけ、英語で書かれている看板を見てすぐさま、オランダ語ではなく英語の時代になっていると気づいた。蘭学がまさに盛りで誰も英語の必要性なぞに気づかない時代の中であって、福澤のこのような発見は、彼の歴史的転換に対する敏感さを表している。

さらに1860年に幕府がアメリカへ使節団を派遣する際には、一員として加えてほしいと福澤は自ら志願をした。当時造船技術がまだ高いとは言えず、海を渡るのは流刑に処されるのと等しく、命を失いかねない危険な旅であったが、福澤はなぜその選択をしたのか。西洋の文明に対する熱心さがなければ、なかなか決断できなかったのではないと思う。実際にアメリカの地に立ったことは、福澤個人のためだけでなく、日本にとって有意義な体験であり、書物を購入することができた。

しかし、当時日本において福澤諭吉だけが西洋文明の優越性に気づき、習得しようとしたわけではない。福澤自身は、日本人がアメリカ人に頼らず、自力でアメリカに船で渡ったということが非常に誇らしかったと述べた。『福翁自伝』には次のように記されている。

「この航海については日本のために誇ることがある。というのは、そもそも日本の人が初めて蒸気船なるものを見たのは嘉永6年、航海を学び始めたのは安政2年のことで、安政2年に長崎においてオランダ人から伝習したのがそもそも事の始まりで、その業成って外国に船を乗り出そうということを決したのは安政6年の冬、すなわち目に蒸気船を見てから足かけ7年目、航海術の伝習を始めてから5年目にして、それで万延元年の正月に出帆しようというそのとき、少しも他人の手をからずに出かけて行こうと決断したその勇氣といいその伎倆、これだけは日本国の名誉として、世界に誇るに足るべき事実だろうと思う。前にも申したとおり、航海中はいっさい外国人の申比丹ブルックの助力は借らないというので、測量するにも日本人自身で測量する、アメリカ人もまた自分で測量している、互に測量したものをあとで見合わせるだけの話で、決してアメリカ人に助けてもらうということはちよいとでもなかった。それだけは大いに誇ってもよいことだと思う。今の朝鮮人、シナ人、東洋全体を見渡したところで、航海術を5年学んで太平洋を乗り越そうというその事実その勇氣のあるものは決してありはしない。ソレどころではない。昔々ロシアのパールト帝がオランダに行って航海術を学んだというのが、パールト帝でもことはできなかつた。たとい大帝は一種絶倫の人傑なりとするも、当時のロシアにおいて日本人のごとく大胆にして且つ学問思想の緻密な国民は容易になかろうと思

われる¹³」。

その答えは以上の引用文にあると思う。福澤は当時の日本人の力をよく理解し、適確に判断した。

これまで、当時のアジア文化圏における各国の民度を比較する研究はまだないだろうが、江戸時代における教育の展開、新しい学問の登場、庶民の意識の高さから見れば、他の国と比べ日本の民度はかなり高かったといえることができると思う。

日本の近代化はゼロからスタートし、現在の日本経済の発展は近代から始まると誤解する人が少なくないが、実際そうではない。江戸時代という約300年にわたる長期的かつ安定した社会状況は、社会の基盤を固め、近代化に進む良い土壌を育んだ。伝統的な学派のほか、洋学などの新しい学問も登場した。交通網の発達、産業の展開、商船の海外進出なども近代化の重要な基盤であった。その文化的・物質的な基盤のおかげで日本人は西洋の文明の優越性に気づき、西洋諸国に侵略される危機を乗り越えることができた。

3. 福澤諭吉の思想における「文明開化」と国家独立との関連性

——ファン・ボイ・チャウの思想における「文明開化」の観念と比較して

前述のように、福澤と当時の知識人は「文明開化」によって近代化を果たし、それを植民化の危機から国を守る唯一の道として確信した。野蛮、あるいは半野蛮の国は必ず文明国に侵略されるため、その危機から逃れるには文明国になるしかないと、福澤は何度も強調した。『文明論之概略』には次のように述べている。

「西洋諸国と日本との文明の由来を論じ、その全体の有様を察して之を比較すれば、日本の文明は西洋の文明よりも後れたるものと云わざるを得ず。文明に前後あれば前なる者は後なる者を制し、後なる者は前なる者に制せらるゝの理なり。昔鎖国の時に在ては、我人民は固より西洋諸国なるものをも知らざりしことなれども、今に至ては既にその国あるを知り、又その文明の有様を知り、その有様を我に比較して前後の別あるを知り、我文明の以て彼に及ばざるを知り、文明の後るゝ者は先だつ者に制せらるゝの理をも知るときは、その人民の心に先ず感ずる所のものは、¹⁴自国の独立如何の一事に在らざるを得ず」。

つまり、文明に進むことが当時日本の急務であり、文明がなければ独立を守ることができない。野蛮な国なら文明国に侵略される。そしてさらに、国家の独立を保つことが文明開化の目的であると福澤は断言した。実際、『文明論之概略』でも「国の独立は目的なり、今の我文明はこの目的に達するの術なり¹⁵」と強調している。

13 『福翁自伝』『日本国人の大胆』、108頁～109頁。

14 『文明論之概略』、294頁。

15 『文明論之概略』、334頁。

独立は日本の文明開化の目的であり、福澤の人生の目的でもある。「一身独立して一国独立する」ということで、一人一人独立すればその国も独立すると福澤は明確に認識した。『学問のすゝめ』でも、この問題について一章を割いて執筆し、学問に専念するよう人々に熱く勧めた。そのため、『学問のすゝめ』は日本の独立宣言書であるという意見があるが、¹⁶過言ではない。

国家独立は福澤の一生の目的でもあり、最後までその道を歩んだ。その道というのは政治に媚びず自分一人で開いていく道である。福澤は明治維新からは距離をとり、戦中でも文明開化を実現するため慶應義塾を維持し、人材を育成し続けた。当時、福澤の著書である『学問のすゝめ』は日本でベストセラーになっており、主に本の収入が家計を支えていた。『学問のすゝめ』は22万部、つまり160人に一人がこの本を買ったという計算になる。当時の日本社会に与えた福澤の影響は小さいということがわかる。

周知のように、洋書を翻訳し自ら本を執筆する以外では、福澤は現在の慶應義塾大学の前身である慶應義塾を開き、運営していた。その過程で、独自の教育方針を実施しながら西洋の科学と独立精神を教授したが、それはアジア各国の教育に欠けている部分であると述べている。特に福澤はなかでも「実学」を重視した。文明開化の際に実学は欠けてはならないものである。

19世紀半ばから20世紀初めまでの日本社会と福澤の活動を、当時のベトナム社会とファン・ボイ・チャウの活動と比較してみると、差異がよくわかる。特に文明開化と民族独立との関連性である。

ベトナムの歴史教科書において「文明開化」について言及する頻度が減っている状況とは対照的に、日本の歴史教科書には、文明開化は「日本政府が富国強兵を目指すため積極的に近代的思想と西洋の生活様式を取り入れた運動である」とある。¹⁷つまり、日本の近代社会において、多くの場合「文明開化」とは、西洋の文明を積極的に導入することを指すのである。「開化」というのは「自分で開化する」という意味で、つまり自動詞として使われる。『福翁自伝』で慶應義塾について次のように語っている。

畢竟わたしがこの日本に洋学を盛んにして、どうでもして西洋流の文明富強国にしたいという熱心で、その趣は慶應義塾を西洋文明の案内者にして、あたかも東道の主人となり、西洋流の一手販売、特別エゼントとでもいうような役を勤めて、外国人に頼まれもせぬことをやっていたから、古風な頑固な日本人に¹⁸きらわれたのも無理はない。

16 西川俊作「解説」『学問のすゝめ』、241頁。

17 石井進・笹山晴生・高村直助著（ほか13名）『日本史A』山川出版社、2000年、112頁。

18 『福翁自伝』「教育の方針は数理と独立」、206頁。

当時の日本社会全般に認められるわけではないが、福澤自身が西洋の文明を自主的に取り入れた姿勢がこの史料からよく見てとることができる。

「文明開化」に対する日本人の認識と違って、『ベトナム辞書』には「開化」について、「時代遅れた民族のために文化を開くことである。この言葉は植民地主義の侵略意図を弁明するためによく使われる。例えば、植民地開化、開化家などである¹⁹」とある。さらにフランス植民地政権下では「経済開発のため文明開化」するとよく言われていた。つまり「開化」とは、白人と西洋の民主主義の優越性を肯定する観念から生まれるものである。日本語における能動的・積極的に受容するようなニュアンスと違って、ベトナム語の「KHAI HOA VAN MINH（開化文明）」は、植民地に対する侵略政策を遂行する行動指針として使われている。問題は、同じ語源を持つ漢字・言葉であるが、なぜ異なる意味で理解されるようになったのか、ということである。

「KHAI HOA VAN MINH」は、ベトナムの近代社会に植民地政権とともに持ち込まれたため、侵略意図が含まれる可能性が高い。実際、ファン・ボイ・チャウは「文明に泣く」という詩で次のように嘆いている。

文明！ 文明！ 文明を聞くだけで鳥肌が立つ。文明を読むだけで怖くなり、目が切られるような感じがする。ああ、文明は人を殺す機械であるのか!? 文明は人を噛むような虎であるのか!? なぜか私は文明をとっても嫌う。聞くだけで腹が立つ。なぜかというとき、当時我が国において文明は本当に嫌われるものであったからだ。²⁰

文明だけでなく洋学について論じるときに、ファン・ボイ・チャウの考え方と福澤諭吉の考え方は完全に異なるのである。

1926年にファン・ボイ・チャウは「西洋の文字を学ぶ」という詩を書いた。その主な内容は「人々が西洋の文字に夢中になるのはおかしいことである。西洋の文字を勉強しても植民地政権のために仕えるしかない。千年の歴史を持っている国の伝統文化を考えるとかなしいことである²¹」というものだ。後にファン・ボイ・チャウが日本に渡り西洋文明の重要性を認識できるようになると、洋書を探究する学年を設置するようにタイン・タイ帝を説得したが、『越南国亡史』に語ったようにすでに遅かった。

19 ホアン・フェ編『ベトナム語辞書』ダナン出版社、2008年、608頁。

20 ファン・ボイ・チャウ『ファン・ボイ・チャウ全集』第7巻、トゥアン・ホア出版社／東西文化言語センター、2001年、421頁。

21 ファン・ボイ・チャウ『ファン・ボイ・チャウ全集』第8巻、トゥアン・ホア出版社／東西文化言語センター、2001年、89～90頁。

もしベトナムがもっと早くに政治や軍事を改革していれば、つまり皇帝も臣民も西洋の文明をより深く理解していればということであるが、それはすべて民族独立に対するファン・ボイ・チャウの夢にすぎない。

むすびにかえて

このように「文明」と「文明開化」は、日本に大きな歴史的転換をもたらした重要なファクターであった。異論はまだ絶えないが、文明開化を進めることによって日本は西洋諸国に侵略されずに独立を保ち、近代化を果たしたといえることができるだろう。残念ながらそれは漢字文化圏の中国やベトナム、朝鮮半島では起きなかった。

偶然ではあるが、1858年に徳川幕府が日米修好通商条約を結ぶことによって日本は世界的に認知されるようになったのに対し、同年ベトナムはフランス植民地となった。自国の現状や世界政治の状況に対する認識の違いから、文明、特に西洋文明に対する考え方も異なってくる。おそらく「文明」は当時、アジア諸国を救うための唯一のカギであった。

以上ではあるが、本報告が、西洋文明および文明開化に対する二つの考え方と二つの民族の歴史的運命との間に、両国の歴史を理解するための関連性があることについて、検討をする素材を提供できたならば嬉しく思う。

主要参考文献

(ベトナム語)

1. チュオン・タウ『ファン・ボイ・チャウ研究』ベトナム国家政治出版社、2003年
2. ヴイン・シン『ベトナムと日本 文化交流』ホーチミン市文芸出版社、2001年
3. ベトナム教育訓練省編『中学3年生の歴史教科書』ベトナム教育出版社、2010年
4. ベトナム教育訓練省編『中学3年生の歴史教科書』ベトナム教育出版社、2010年
5. グエン・ティエン・ルック『明治維新とベトナム』ベトナム教育出版社、2010年

(日本語)

6. アルバート・クレイグ『福澤諭吉の歴史意識と文明開化』（福澤記念選書 35）慶應義塾大学、1985年
7. 丸山真男『『文明論之概略』を読む』（上、中、下）岩波新書、1986年
8. 河野健二『啓蒙思想家としての福澤諭吉』（福澤記念選書 12）慶應義塾大学、1975年